岐阜県白川町におけるボランティア団体による地域学校協働活動の促進
―地域学校協働活動にこめる「地育のちから」―

纐纈守章[1)]・塩月祥子[1)]・益川浩一[2)]
[1)] くろかわ地育リーダーズ（〒509-1431　岐阜県加茂郡白川町黒川 3057）
[2)] 岐阜大学地域協学センター（〒501-1193　岐阜県岐阜市柳戸 1-1）

１　はじめに

本稿では、岐阜県白川町黒川地区における地域学校協働活動発足の経緯及びその実践について述べる。黒川地区は、加茂郡白川町内にある。白川町は、人口７，５１１人、世帯数３，０８９世帯（令和４年７月１日現在）であり少子・高齢化が急速に進み、県下でも消滅可能性の最も高い自治体の一つとされている。また町の面積は、２３７．９平方キロメートルと広く、この中に６つの小・中学校が点在している。少し前までは小学校は５校あったが、令和２年４月に２つの小学校が統合されて４校となった。また、中学校は３校あったが、令和４年に統合され２校となり、小学校４校、中学校２校に統合再編された（図１）。児童・生徒の減少に伴い、今後も更に学校統廃合を進めるためのスケジュール案が教育委員会より提示され、住民への理解が図られている。黒川地区は、人口１，７５３人、世帯数７４４世帯（令和４年８月１日現在）が、標高４００ｍから７００ｍの中山間地域に点在にする集落に居住している。令和４年４月１日現在、黒川地区には中学校１校（生徒数２８名、３学級）、小学校１校（児童数５７名、５学級、複式学級含む）の小規模校がある。保護者や地域の方々は、昔から学校を大切に思い、学校への協力は厭わない地域風土が醸成されている。また黒川地区は、「芸能の里」とも言われ、明治時代に建てられた農村歌舞伎小屋「東座」が唯一現存し、毎年一般の人たちとともに小・中学生も一緒に加わり地歌舞伎公演が開催されている。小・中学生は、学校の総合的な学習の時間を活用して、地元の指導者から地歌舞伎や三味線・太鼓を継続的に教わり、地域に残る芸能を学んでいる。産業は、農林業が主であるが、中でも建築業に携わる人や建築業を支える周辺の職種に就いている人が多い。近年は、黒川に多くの方が移住先を求め地域に定住し、新しい農業経営等を試みながら溶け込み、新しい活力が吹き込まれている。

図１　白川町の学校配置

２　白川町の地域学校協働本部

白川町は、地域の特徴を生かして他に類を見ない地域学校協働本部を組織した事例である[1)]。白川町は、前述のとおり、町内に４小学校と２中学校を有する。学校運営協議会は、全学校に導入されているが、その置き方は中学校校区によって異なる。黒川中学校区、佐見中学校区（令和４年３月まで）は、小中合同の学校運営協議会を設置しているが、白川中学校区は校区にある２小学校と中学校それぞれに学校運営協議会を設置している。令和２年度、まず、黒川中学校区に地域学校協働本部が設置された。

黒川地区では、社会教育委員が発起人となって、「くろかわ地育リーダーズ」が発足し、地域学校協働本部機能を担っている。「地域を育てる、地域も育つ」という願いが込められた「地育」という言葉は、この地区の子育てサロン（子どもミライ会議）で生まれたものである（後述）。委員長、発起人の社会教育委員、地域学校協働活動推進員の役割を担う地育コーディネーターで構成される。コーディネーターは、地区公民館に勤務する公民館主事と町移住・交流サポートセンターの集落支援員である。図２に示すとおり、小規模地区の強みを生かし、本部の構成員を必要最小限に収めつつ、公民館主事や集落支援員といった多様なネットワークを備え、かつ、即戦力として動くことができる人材を配置している。協働本部長は学校運営協議会長であり、社会教育委員も学校運営協議会の委員を兼ねている。コーディネーターのうち１名が、学校運営協議会に参加する体制をとっている。

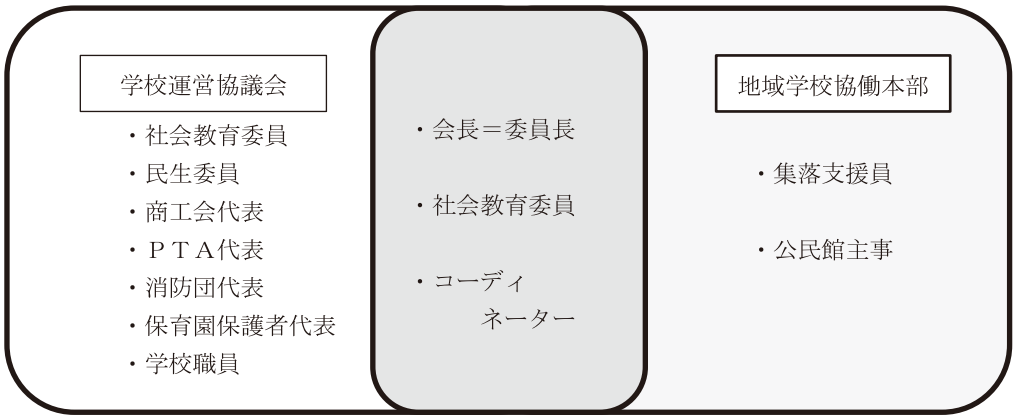

図２　白川町黒川地区の学校運営協議会と地域学校協働本部

「くろかわ地育リーダーズ」が携わる代表的な活動に、中学校の職場体験がある（詳細は後述）。生徒が体験したいと希望する職種の全てを地育リーダーズが調整し、準備した。「放送局関係」といった、一見受入れ先を見つけるのが困難だと思われる職種も含まれていたが、本部の人脈を生かして全生徒の希望をかなえた。その裏には、「中山間部の小規模地域だからと言って夢をあきらめる子どもがいないように」という地育リーダーズの強い思いがある。言い換えるなら、それは地域住民の願いでもある。多くの地域の事業所や個人との折衝を必要とする職場体験は、学校にとって負担の大きい活動であるが、地育リーダーズの支援により、学校の負担が大きく軽減されるとともに、内容も一層充実したものとなった。本部発足時に全戸配布された紹介チラシ（後述）の中に書かれた「学校だけでは教えられないことを地域住民の力で」という言葉を、まさに具現している。

白川町では、令和３年度のぎふ地域学校協働活動センターの地域学校協働活動推進員等育成研修を受講した社会教育委員が中心となり、センターの長期支援プログラムも活用しつつ、各地区の社会教育委員に対して地域学校協働活動の理解を深めてきた。今後、全学校に地域学校協働本部を整備することを目指し、各地区の社会教育委員がそれぞれの学校運営協議会で、地域学校協働活動の説明を行っている。社会教育委員は、地域学校協働活動推進のキーパーソンとなる大きな力をもった人材であるが、公民館職員とは異なり、活動の拠点をもたないことが多い。その力を生かすために、こうした場を工夫して生み出すことも重要である。

３　くろかわ地育リーダーズ発足の経緯

３－１　学校運営協議会発足

白川町は、平成２７年に学校運営協議会設置規則を定め、翌年４月から町内の各学校に学校運営協議会制度を導入した。しかしながら、導入直後に学校再編構想が打ち出され、本来の学校運営協議会の合議性の趣旨を見失い、本来の趣旨と乖離した時期があった。黒川地区の学校運営協議会は、小学校と中学校で１協議会とし、一貫した子どもの育ちを支えるため、保育園・小学校・中学校の保護者代表をはじめ、地域を代表する１７名で構成された。

３－２　熟議

黒川地区の学校運営協議会においても、全町の学校運営協議会で話題となった学校再編構想に触れなければならなかった。学校運営協議会長は、学校運営協議会委員だけの熟議で方向性を見定めるのではなく、地域内の保育園・小学校・中学校の保護者や地域の代表者たちを含めた多くの人の熟議を経て、方向性を見定めるべきだと提案した。そして、学校再編構想の是非の議論にとどまらず、黒川に住む子どもたちの将来をどのように考えたら、子どもたちは自己実現に向かって力強く歩んでくれるかという面まで踏み込んだ話題

図３　熟議の様子

にしなければならないと説いた。

これを受けて、学校運営協議会が中心となって、地域の代表者や保育園、小学校、中学校の保護者に参集してもらい、意見を述べあった（図３）。熟議の観点は、①地域全体で子どもたちを育てられないか、②黒川の地域力をさらに高めるためには、どうしていけばよいか、に焦点化された。参加者が声をあげ易いよう、この地域で子どもたちを育てるメリットやデメリット、この地域ならではの特性に話題をひろげていった結果、地域の持つ有形・無形の財産が子ども達の生きる力を育む原動力になるという認識を共有するに至った。この共通認識を生む背景には、子どもを持つ移住者の新たな視点が先住者の地域認識を覆し、地域のよさの再発見につながった。こうしたいくつかの意見交流を積み重ねた結果、「学校を核とした地域づくり」ができないかとの思いに至り、その思いが地域学校協働活動の趣旨に合致していると気づかされることとなった。

３－３　「地育」の由来

図４　子どもミライ会議の様子

保育園近くにある町有施設で、週１回「子どもミライ会議」というメンバー不特定の会（図４）が開催されている。子育ての悩みや教育環境について気軽に語りあえる場づくりという目的で始められた会である。学校再編は、将来子どもを託す保護者にも意識が高く、関心のある話題の一つとなった。熟議に参加した母親が中心となり、この話題を熟議に参加できなかった保護者にも情報を提供した。「子どもミライ会議」の中で、小・中学校に子どもをあげたときに期待する学校や地域について真剣に話し合った。導き出した結論は、①地域の持っている力で子どもを育てる、②地域の人と子どもとの関わり合いが増えれば、少子高齢が進み疎かになりがちな地域住民同士のつながりを強められ、さらには絆が強められる。こうした活動を地域に向けてひろげていけば、地域の活性化も図られていくというものである。保護者たちは、この２つを言い表す言葉を造語で「地育（ちいく）」と名付けた。「子どもミライ会議」に参加した保護者たちが将来の子どもの育ちに願いを込めた「地育」である。

３－４　地域学校協働活動の歩み出し

学校運営協議会発足から４年後の令和２年２月、地域や保護者の熟議で得られた意見や願いを踏まえ、また子どもたちには、ふるさとで過ごす時間を少しでも濃密に過ごし、愛着を感じてほしいとの願いを趣旨に、黒川地域学校協働本部の立ち上げを学校運営協議会に諮り、承認された。歩み出しの地域学校協働本部の構成メンバーは、学校運営協議会長、社会教育委員、集落支援員、公民館主事の５人でスタートした。公民館主事を除く３人は学校運営協議会の構成員を兼ねることになった。地域にあるネットワークを有効に機能させる公民館主事は、公民館長に地域学校協働活動の趣旨や活動例などを説明し、理解を深めてもらった後、勤務中の仕事の調整などを話し合い本部の活動への参加について了解を得た。主事本人の承諾を取り、一緒に活動できる推進体制を整えた。次に地域に理解や活動を浸透させていくために、黒川地域学校協働本部では、余りにも堅苦しく、新しい地域組織と捉えられてしまう恐れを払拭し、今までの学校に対して行ってきた支援活動との整合性を図るためにも親しみ易い名称を考えることにした。「子どもミライ会議」を主宰している集落支援員は、親の願いが込められた「地育」という言葉を提案し、メンバーもその言葉に共鳴し「くろかわ地育リーダーズ」の愛称（以下、地育リーダーズ）に命名、決定した。

メンバー５人が話し合い「地育リーダーズ」に込めた願いは、今まで以上に黒川という地域を子どもたちの「心の根っこ」に植え付け、地域の将来を担う人材の育成を核に活動を展開することである。また、子どもを介して地域住民のつながりを深くし、絆をより強化していくこと、結果的にはそれが地域づくりに貢献していくであろうとの仮説に立った。この活動こそが、「学校を核とした地域づくり」であるが、あくまでも学校と地域を結ぶハブとしての役割を自覚し、地域の協力・支援を求め学校と協働していくことを目的とする。それには、地域へ趣旨説明と協働活動への理解が必要であると考えられた。

３－５　活動開始の周知

図５　チラシ

活動を始めるにあたり、関係協力団体と思われる代表を集めて理解や周知を図る機会が持てると、円滑な歩み出しができると期待されたが、新型コロナウイルス感染症予防のため人々が一堂に介して行う会議が制限されたため、思うようなスタートとはならなかった。少しでも地域の住民の理解を得ていくために、チラシを作成し、全戸配布することにした（図５）。チラシに込めた願いは、「地育リーダーズ」が学校と協働して地域と関わり、子どもたちの学びや活動を支えるハブになる活動をめざしていること、このことを通して、子どもたちの「心の根っこ」に「黒川」という地域の存在を保育園期から中学校期にかけて存分に植えつけて社会に送り出してやりたいという内容である。それがいずれ地域づくりや地域の支えとなって還元されると強く信じているという思いを大切にして発信された。

４　学校との協働による実践事例

チラシの配布と同時に小学校及び中学校にも足を運び、「地育リーダーズ」の願いを学校にも共有してもらうとともに、何ができるかを一緒に模索しながら考え、次のような実践に結びついた。

４－１　中学校の職場体験

中学校２年生を対象に行っている職場体験である。体験先の職場をコーディネートしてほしいとの依頼である。それまでの職場体験先は、中学校が情報として持っている地元の個人商店や農協、郵便局、高齢者施設といった限られた場所であった。自分の将来の夢やなりたい職業とはかけ離れることが多い２日間の体験学習であり、地域内では夢が叶わないのではと生徒たちに思われてしまう一因にもなっていた。しかし、学校の担当する先生にしても新しくそれぞれの夢や希望に沿う体験先を探していくのがよりよい方法だと理解はしていても、日常の業務に加えての労力や地域内の最新情報を収集することは困難と言わざるを得ない状況である。そこで「地育リーダーズ」は、子どもたちが将来に向けて考え、夢見ている仕事に対し、地域の中で少しでも近い体験ができる場所を提供することを大切に取り組んだ。

４－１－１　職場体験先への交渉

学校では、生徒たちに自分の将来を見つめさせて、今の自分が考えているやりたい職業等を「夢シート」に書かせてあり、地育リーダーズのメンバーは全員の「夢シート」に目を通し、できるだけ一人ひとりの希望に沿えるよう話し合い、地元黒川内のネットワークを駆使し体験先を探した。事業者の選定が終わるとメンバーがそれぞれ分担し、事業所や個人事業者に受け入れの可否の交渉に出向いた。交渉にあたり学校が作成した実施要項を配布し、期日や体験の趣旨、時間、保険等について丁寧に説明を加えた。事業者の受入れ時に課題として考えていることを聞くなど、丁寧に時間をかけ、打合せを行った。そして、後日受入れ可否の回答と事業所プロフィールをもらうこととした。体験先事業所からの回答がすべて整ったところで、コーディネーターが学校に出向き報告するというプロセスである。生徒たちの夢に近い体験先を紹介することで、地元ではできないと思っていたことを既に実践している人がいると知ったり、地元でも好きなことができるということを感じてもらいたいのが願いである。

学校は紹介された体験先と事業所プロフィールを生徒に伝え、生徒の納得が得られれば体験先が決定する。生徒（体験者）は、学校を介して事業者と連絡調整を図っている。しかし、黒川地区内でかなえられない職種を希望する生徒もいる。その場合は、町内にある体験場所への変更を学校や家庭の了解を得つつ夢実現の場所として紹介した例や、やむなく第２希望で調整した例もある。さらには、中学校とも調整・理解を図ったうえで、不登校生徒の体験先も準備した。体験先を依頼された事業者は不登校生徒の心情を理解し、守秘義務にも触れた上で了解が得られた。受入れ環境まで整え準備をしてもらえたが、残念ながら実現には至らなかった。

４－１－２　職場体験の実際

職場体験先は、地元の企業だけでなく、自営業や個人事業者にまで広がっている。例えばフラワーアレンジメントの仕事に就くことを夢見ている生徒（図６）には、地元の野山の草花をリー

スにしてネット販売をしている事業者のもとで、受入れてもらった。地元で好きなことができるのかと不安に思っていた感情が、地元に居てもできるという希望に変わったと話したとの報告が聞かれた。また、生き物が好きな生徒には、アマゴを養殖している農場を紹介した。職場体験後、アマゴの産卵受精時期に農場主から体験者に再度声を掛けられ体験を積み重ねたということである。さらに、地元では夢の実現は難しいと考えられていた「ラジオのパーソナリティになりたい」と願う生徒（図７）は、ポッドキャストという私設ラジオで発信している農場で体験をしてもらい、番組の企画からインタビュー、編集、そして公開までのひと通りの過程を体験させてもらった。地元でできる驚きとともに、大変な満足感を得たとの感想が聞かれた。さらには、小学校へも２人の生徒が体験に行った。小学校校長をはじめ、すべての職員の理解があったからこその体験先である。英語の先生に興味のある生徒（図８）の受入れは、ＡＬＴのもとで行った。学校の先生を将来の仕事にと考えている生徒には、学級担任や学習支援員の先生にサポートしてもらいながら体験をした。生徒の夢に合わせて、推進員全員のネットワークを駆使して受入れ先を検討していった結果、体験先の幅が広がることにつながった。

図６　職場体験の様子

図７　職場体験の様子

図８　職場体験の様子

４－１－３　職場体験の生徒の反応

職場体験終了後、学校が生徒に行ったアンケートによれば、働くことの大変さや感謝の気持ちを「働くことの大変さを自分の周りで働いていて下さる方々への感謝の気持ちに変えていきたい。」と述べたり、実際に体験することでしか得られない感想として「一番うれしかったことは,『伝わる』ことでした。自分の説明を聞いて小学校の子が『なるほど！』と理解してくれることが何度もあり、『あぁ伝わったんだ。』とすごくうれしい気持ちがあふれました。私は、先生は大変だけどやりがいのある仕事だと思いました。」と述べられている。どの生徒も、紹介された体験先に満足感と充実感が得られた感想を持ち、自分の将来への展望を具体的に描ける機会が提供できたと考えられる。

４－１－４　コーディネートを任せた学校の反応

今までは、学校が持つ限られた体験先の情報をもとに、生徒の体験先を決めていたが、地育リーダーズに体験先の調整を委ねた結果、次のような学校からの感想が寄せられた。「学校では体験先の発掘には、時間と余力が必要だが、それが保証できない中、生徒の希望に沿った事業所を探してもらえた」との評価が最上位に上がってきた。特に初年度は、「学校も生徒も思いもよらない体験先が紹介されてきたので、驚きと興奮をもって紹介を受入れてもらえた。特にふるさと教育を大事に考える学校の方針を、地育リーダーズが十分に理解したうえで取り組んだ結果と受け止めている。」。次に教師の側からは、「地域内の職場の把握に限界があるため、生徒の希望と少し異なる場所を紹介してしまうデメリットが解消された。」という意見や「地域の方々の協力でこの職場体験ができていると生徒に伝えられるので、ふるさと教育の一環として大きな意味をもつ学校行事となっている。」といった感想があった。これらの意見を聞いて地育リーダーズは、やりがいと次へのエネルギーの源になるという強い思いを抱いたのである。

４－１－５　受入れ事業者のアンケート結果

職場体験が終わった後、地育リーダーズから事業者にアンケートを配布し、次回の取り組みへの問題や課題を収集した。体験先事業者から100％の回収率であった。今後も体験希望者があれば、引き受けるかとの問いには、今後も引き受ける、条件があえば引き受けるとの前向きな回答が事業者全員からあった。大きな課題はなかったが、詳細確認を直接学校とやり取りしながら詰

めたかったという意見があった。受入れのメリットは、生徒たちの将来の職業の選択肢の一助になればよい、あるいは、自分が住んでいる地域の仕事として知ってもらえることがうれしいという反応であった。反対に事業者のデメリットとしては、個人事業のため、長時間体験者について関われなかったり、お客様の急な注文の対応などに時間を割さかざるをえなかったこと、職業の特性上特別なプログラムを作成しなければならないなどの負担があったとの回答があった。しかしながら、よい体験学習ができるようにするための工夫として、その日の体験内容を朝確認したり、受入れのためのプログラムを作る、体験者の担当者を決めたり、帰り際に反省会の機会を持つなどが実行されており、受入れ側の努力あっての充実した体験活動となっていたことがうかがわれる。

４－２　中学校：職業講話

中学校が令和３年度から位置づけたのが職業講話である。１年生を対象にした授業で、２年生に行っている職場体験につなぐことを意図して計画された。講師選定の依頼を受けた地育リーダーズは、地元に生活基盤を置き、「黒川に生きる」をテーマに講話ができる人を探すことにした。選定対象を家業の後継者、傘下企業に勤める人、個人事業主から男性２人、女性１人を選び依頼に出向き内諾を得た後、学校に報告をした。講話当日、講師は「仕事と私」と題して生徒に自分の生き方や仕事に対する誇りを話された後、生徒たちとのグループワーク（図９）に参加し、生徒からの質問に応じ、語り切れなかった思いを詳細に語られた。このことを通して、生徒たちからは、「黒川の地で仕事に携わる姿勢や生き方、仕事に対する思いをそれぞれの講師から聞くことができてよかった」との感想が寄せられたと学校から報告があった。

図９　グループワークの様子

４－３　小学校：まちたんけん

小学校２年生教材「まちたんけん」の探検先のコーディネートを行った。今までの場所は、郵便局や農協、ガソリンスタンドなど、普段でもよく利用される決まった場所が学習場所となっていた。地育リーダーズが小学校から探検先の依頼をされるにあたり、普段なかなか立ち入ることのできない工場や、子どもたちに知ってもらえたらと思える人や場所を念頭に、地域の要となりえる所の紹介をめざした。地育リーダーズの願いは、①地域のことをもっと知り身近に感じてほしい、②地域の中にはいろいろな仕事があることを知ってほしい、③地域の人を身近に感じかかわりあってほしい、の３点とされた。小学校においても、受入れ側に授業の目的やねらいを伝えるために担任から実施要項をもらい、依頼先に説明し理解を得る橋渡しを行ったうえで受入れ可否の回答をもらっている。これまで依頼したところは、目的を理解し喜んで引き受けてもらえている。限られた時間の中、徒歩やスクールバスを移動手段としているため、訪問順序や移動距離・時間なども検討内容に含めている。子ども達に企業、個人事業者を問わず地元ならではの地

図１０　家具工房

図１１　製茶工場

図１２　有機農家

域パワーが伝わる観点も大切にしている。地域内にアンテナを張り巡らし、その時を逃がせば授業中では見学できない工事現場であったり、木を加工する家具製造（図１０）や建具屋、町の特産品であるお茶製造工場（図１１）、インターネットを使って野菜を販売している移住有機農業家（図１２）、シイタケの原木栽培農家など個人単位で営んでいる方たちをもクローズアップし、刺

激ある探検ができる構成に配慮した。

４－３－１　子どもの反応

普段何気なく通り過ぎている場所での再発見に、子どもたちの目は、いきいきと輝いていた。黒川には、こんな仕事をしている人がいるんだという驚きとともに、「黒川の人と直接かかわることができてうれしかった。」「お話してくれたおじさんやおばさんは、とっても元気でやさしいな。」という感想や、「地域の人に大事にしてもらっていることがよくわかったよ。」、また、「感謝の気持ちを込めて恩返しがしたいな。」等の素直な感想がでてきた。地域の知らないおじさんやおばさんから顔見知りのおじさんやおばさんへと見方が変わり、その優しさを受け止め、地域を身近に感じてくれる機会になった。

４－３－２　学校の反応

学校が持つ情報量を超えた情報を地育リーダーズから提供することで、担任の先生の負担はかなり軽減された感触を得られた。「すべての手はずを整えてもらえた。」「地育リーダーズにお願いしたことで、担任や学校の負担がかなり軽減された。」、また、「学校だけではとても見つけることのできない見学場所や人材を紹介してもらえた。」、「地域の方のパワーや温かさを子どもたちだけでなく、担任自らが同行する中で感じることができた。」、「担任も地域と直接関われる貴重な機会ととらえられた。」、「担任と子どもとが一緒に地域の方のパワーに触れることで温かさを体感し、地域への見方が変わる時間となった。」との感想が寄せられた。

４－３－３　受入れ側の声

受入れ側に授業終了後、地育リーダーズからアンケートを行った。子どもたちの受入れには好意的で、こうした機会があれば今後も引き受ける、または条件があえば引き受けるとの回答が１００％であった。特に「地域でどんなものを作っているか、どんな会社があるかを知ってもらい、お茶をはじめ地域の産物に興味をもってもらえてよかった。」、また、「子どもたちが地域の中で活動してくれるとにぎやかで楽しいし、低学年からこのような体験は非常に良いことだと思いました。」、など前向きな意見ばかりで、受入れ側にも喜んでもらえているという確信が得られるとともに、手応えを感じ取ることができている。

４－４　「森と木の環境教育支援事業」を地域とつなぐ

県の補助事業を受け、小学校４年生・５年生・６年生がそれぞれに体験をした授業である。地育リーダーズは、指導者紹介の依頼を受けた。４年生は、カワゲラウォッチングや水質検査を通した河川環境の学習である。学校近くを流れる川に出てカワゲラをはじめとする水生動物や魚類の採集を行い、採集した水生動物を河川の汚濁度別に棲む生物図との比較を行い、上流部のきれいな水に生息する生物しかいないことを学習（図１３）した。さらには、水質検査を行い、きれいな水が流れていることを確認した。周りの山がきれいな水を作り出していることが理解できた。６年生は、木材の利用や恩恵を知る学習内容で、木のスプーンづくりやアクセサリーづくりを行った。黒川は東濃ヒノキといわれる檜が植林されており、建築資材として産出されていることは、子どもたちもよく知っている。木にはいろいろな種類があって、材質が異なり加工や用途が異なってくることを学習した上で、加工しやすい朴の木を使ってスプーンやアクセサリーづくり（図１４）に挑戦した。

図１３　４年生の学習の様子

図１４　６年生のスプーン作り

図１５　ベンチづくりの様子

４年生・６年生の指導には、地元で広葉樹の植樹活動をしているＮＰＯ法人美濃白川どんぐり会に依頼した。５年生の間伐体験には、地元林業家と地域おこし協力隊に、間伐材を使ったベンチ

づくりの指導（図１５）は、保護者の年代に近い４０歳代の大工に依頼をした。全員ヘルメット着用で安全確保を行った上で、立ち木に林業家の指導のもと、のこぎりを入れ全員がロープを引っ張りながら木を引き倒す作業は、感動とともに貴重な体験となった。切り倒した木材は、ベンチづくりに使うために木の皮を道具を使って剥ぎ、翌年まで乾燥させ次年度の学習材料に廻した。当該年度のベンチ材料は、前年の学年が切り倒した木材の材料を使用した。ベンチ制作は地元の大工に手ほどきを受け、運動会などでみんなが座ることができるベンチを製作し（図１５）、活用できる財産として残すことができたことで、地域ならではの体験につなげることができた。

４－５　小学校防災キャンプ

６年生で実施される修学旅行は、児童の心に深く刻み込まれる行事の一つである。黒川小学校は毎年京都・奈良を研修先として実施しているが、新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、修学旅行の実施を見合わせなければならなくなった。一生の思い出につながる修学旅行に代わる飛び切りの思い出を残させたいと願う保護者と子どもたちの強い気持ちが受け止められ、学校の前向きな検討によって、体育館を利用した１泊２日の防災キャンプを行うことに決まった。その実現に向けてのコーディネートの依頼が地育リーダーズに舞い込んだ。防災キャンプまで１ケ月ほどしか残されていなかったが、その間に何度も学校に足を運んで調整を重ねながら、子どもたちの１泊２日の最高の思い出づくりへの実現に向けて取り組むこととなった。

４－５－１　茶道・華道体験

図１６　茶道体験の様子

図１７　華道体験の様子

京都・奈良の寺社等を訪れて歴史を学ぶ機会が失われたことで、「わび」や「さび」の一部でも体験したいという子どもたちの願いをかなえてやりたいという学校の意向から、お茶とお華の講師のコーディネートの依頼があった。地元から講師を探し当てるまでは比較的容易だったが、限られた時間に子どもたちに体験させるのは無理だと初めは断られたが、開催の趣旨や願いを説明し、「〇〇道」と考えずに雰囲気だけでも工夫してお願いできないだろうかと相談にも乗る形で依頼した結果、引き受けてもらうことができた。茶道体験では、講師の好意で学校の音楽室に赤い毛氈を敷き、また、大きな和傘を持ち込むなど雰囲気が整えられた（図１６）。茶菓子は講師が自らデザインし、この日のために地元の和菓子屋さんに作ってもらったもので抹茶を味わう体験となった。華道体験では、自分が気に入った地域内の畔や周辺にある草木や木々を採集し、ペットボトルに花を生けた。剣山や花器を離れ、子どもたちにも自由に気軽に楽しんで生けることができるペットボトルを花器代わりにしたアイディアは、講師の工夫によるものである（図１７）。また、生けられた作品は、しばらくの間、校舎内に展示された。

４－５－２　防災キャンプ「薪割り・お釜ご飯」

夜は、非常食体験を兼ね、薪を割り、薪炊きのお釜ご飯体験が準備された。お米は、地元黒川でとれた有機・無農薬米が使用された。指導者は、黒川に移住して農業を営む４０歳代の有機農家に依頼した。指導者の元で刃物の使い方や火の炊き方、薪の組み方と火力、ご飯の炊け具合の確かめ方等々、多くの学びのある時間となった。現代は、ガスや電磁調理器の時代であり、薪を自在に使って生活していた世代はもういない。生命を保持するのに欠かせない失われつつある技能獲得の一つに挑戦した機会となった。

４－５－３　夜のお楽しみ演出

夜は、以前東座（農村歌舞伎小屋）でお化け屋敷のイベントを企画した地域の人たちが、昼間とは違った学校の雰囲気を子どもたちに楽しんでもらおうと、校舎内にお化け屋敷を企画した。その後、校庭に出て星に詳しい地域の方の協力を得て、晩秋の星空観察を行った。さらに保護者のサプライズで花火までもが打ちあげられた。盛り沢山の企画を楽しんだ子どもたちは、体育館に準備したテントに入り、充実感と思い出に残る行事に浸ることができた。準備時間の短い中で地域の方々の惜しみない協力を得た行事となった。

４－５－４　子どもの反応

修学旅行に代わる防災キャンプの子どもの反応は、「自分たちの思いが実現できたことがとてもうれしかった。」、「自分たちのために、こんなに沢山の方々が関わってくださったことに感謝の気持ちで一杯である。」、さらには、「黒川にも沢山の魅力があることがわかった。」など、地域への見方が変わるきっかけになったことが評価できる。子どもたちの最終学年で味わう最大の行事をコロナ禍であきらめざるを得ない状況の中で、地域の人たちの力で子どもたちの思いを遂げられたことは、最高のプレゼントであった。

４－５－５　学校の反応

「自分たちの思いを地育リーダーズに伝え依頼したことで、ここまで協力をしてもらえるとは思わなかった。手はずや準備、片付けまですべてやってもらえた。」、また、「多くの方と子どもたちが活動することで、学校では学ぶことができない生き方を感じ取ってくれたと思う。」、「今回の防災キャンプで全職員が、地域力を強く感じてくれた。」など教員や学校に地域の持つ力を身をもって強く体感できる機会となったことが大変重要である。

４－５－６　アンケートによる協力者の反応

関わってくれた地域の人の声は、「最初は引き受けることにためらいがあったが、子どもと一緒にやってみたらとても充実した時間を過ごせた。また、このような活動であったら、是非次回もやってみたい。」、さらには「黒川ならではの活動が続いていくと良いと思った。」など評価する意見が出された。その結果、こうした話があれば今後も引き受けるや条件が合えば引き受けると回答した方は、１００％であった。アンケートの結果から、戸惑いや不安を感じながらも受入れ、実行に移してみたところ、喜びが味わえ自己充実感につながっていったことがうかがわれる。この自己有用感が、この地域で生きる重要な活力源に繋がっていくことが期待される。

４－６　読み聞かせ

小学校では、年６回の読み聞かせが、朝の１５分間に位置づけられている。読み聞かせをするボランティアを毎年募集するが、ＰＴＡは保護者を対象に声かけを行い、地育リーダーズは地域に対して声かけを行っている。地域へは、普段の読み聞かせができる人材に加え、ボランティア参加者の個性が光る多様な方に働きかけ、読み聞かせを行ってもらっている。地域で習字を教えている先生の参加や、趣味で落語をやっている方による落語の披露、地域でゴミ拾い活動を行っているヒロウンジャーによる読み聞かせ（図１８）などである。このように地域の方々が参加することにより、読み聞かせというの一つの活動でも多様な体験への工夫ができる。

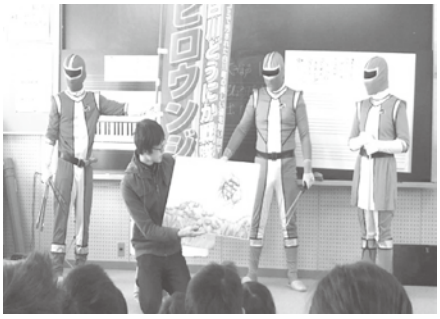

図１８　ヒロウンジャーによる読み聞かせ

４－７　家庭教育学級講師紹介

「地域で家庭教育を支える」をテーマに、川遊びも自由にできなくなってきた昨今、親子が雑魚釣りを楽しみながらふれあおうという企画に、小さい時から川で釣りに親しみ、川をよく知る地元の方を講師として紹介し、保護者と子どもたちとが関わることのできる学習機会となった。

５　地域との協働による実践事例

地域を元気にし、地域愛を高めていく機会として、地域で自主的に活動できる場づくりを活動団体と協働して進め、子どもたちにボランティア活動を進めるよう奨励している。黒川で育つ子は、先生が地域の行事に協力するようにと声をかければ、こぞって素直に応じ盛り上げてくれる。しかし、今の時代に育てたい人間像は、主体性や判断力という言葉がキーワードとなっている。地域も時代に求められる子ども像に応じる必要がある。そこで主体性を実現するためにボランティア募集チラシは、学校で一斉に配布してもらうが、学校に募集用紙回収ボックスを置かせても

図１９　ボランティア参加証

らい、自分の参加意思を自身で決定して投入してもらうように応募方法を変更した。一方で、先生方の回収等の負担を減らす目的もある。各団体がボックスから回収した用紙をもとに参加者を把握し、ボランティア活動事業を実施する。参加した生徒には、地育リーダーズの作成したカード「ボランティア参加証」（図１９）を渡している。このカードの積み重ねが、参加した子のボランティアキャリアの一助となり、将来の生き方の充実や生活の質の向上に繋がっていくことが期待されている。なお、活動後には主催団体より参加した子どもの氏名を保育園・学校に報告し、連携を図っている。

５－１　実践事例：未来につなぐ里山づくり

ＮＰＯ法人美濃白川どんぐり会は、山林保全、水源の涵養、獣害防止等を目的に設立された広葉樹の植樹団体である。植樹は、計画的に年３回ほど行われるが、令和３年１１月の植樹には保育園・小学校・中学校から１９人のボランティア参加が得られた。中学３年生であっても毎回参加してくれている生徒もおり、大人との交流が広がっている。自分で時間の使い方を工夫し、参加の機会を生み出している子どもに頼もしさを感じ取ることができた（図２０）。

図２０　子どもたちの植樹ボランティア

５－２　実践事例：みんなで地域の図書室をつくろう

黒川地区の町移住・交流サポートセンター「晴耕雨読とみだ」に地域住民からたくさんの個人蔵書が寄贈されたことに伴い、本の整理ボランティアを募集した。町の図書館を職場体験場所として選択した生徒の経験が早速生かされる機会となり、その生徒が中心となって、手際よく他のボランティア仲間に指示を出しつつ本の整理（図２１）にあたり、異年齢の子も自分の役割を心得て協力し楽しく作業する場となった。

図２１　本の整理ボランティア

５－３　実践事例：ウインターイルミネーションの飾り付け

自治協議会（黒川地区内の１２自治会を東西南北に分け、そのブロック代表で構成された会）と輝らす会（商工会有志）による、冬の名物景色を作り出してきたイルミネーションである。毎年中学３年生が、イルミネーションの飾り付けを手伝うと共にアイデアを出し合って一つの作品を展示している（図２２）。地域を灯すイルミネーションが地域を元気にしてくれる地域づくりの象徴でもある。イルミネーションの制作の過程を知ってもらい、伝承することを兼ねて地育リーダーズが募集を担うようになってからは、募集対象を中学生全員としている。

図２２　イルミネーションの飾り付け

５－４　実践事例：地域の祭りの振り付け

少子・高齢化の波は、祭りの余興の継続にも大きくのしかかっている。自治協議会より選出された委員が中心となって祭りの在り方を見直し、この先も続けていける祭りへと転換をめざしている。この祭りの踊りの振り付けを中学生に依頼することとし、地育リーダーズが募集をしたところ、３名の生徒が自ら名乗りを上げた。創作する困難さは容易に想像できるが、踊りの振り付けを３人が力をあわせて完成までこぎ着けた。子どもたちが活躍できる場が地域には多くある。大人が関わることができる場を提供し、大人とのコミュニケーションを楽しみ、そこから何かを学べば、めまぐるしく変化する社会に対応・適応して生き抜く力をつけることが期待できる。

５－５　実践事例：地育放課後子ども教室

令和３年６月から、週１回の「地育放課後子ども教室」を立ち上げた。子どもの放課後の居場所づくりとして、施設は学校から近い黒川ふれあいセンター（地区公民館）の一室を借りて運営することとなった。公民館所属のコーディネーターから地域の方に見守り役の声がけをしたとこ

ろ、快く１０人の方から承諾を得ることができ、順調な開設となった。開設を前に見守りに不安がなくなるよう研修会を設け、安心して従事してもらえるよう配慮した。一方、小学校との連携を密にして、確認ミスや事故が起きないように安全への配慮がなされている。現在は小学校２年生から６年生までの１６名が利用しており、各回３人体制で従事している。子どもたちは、「こんにちは、お願いします」と元気な声をかけてくれる。見守り役も笑顔で「おかえり」と迎えている。子どもたちは、部屋に入るとすぐに私語もなく宿題に取りかかっている（図２３）。見守り役は、宿題の一つとなっている音読やリコーダー練習の聞き役も行い、口頭で評価してやり宿題完了のサインをする時は、自分の子育て時代を思い起こすひと時でもある。家の人とは違う大人に音読などを聴いてもらうのは、子どもにとってもよい体験となっている。３０分から４０分机に向かった後は、見守り役が用意したゲームをしたり、子ども同士で考えた遊びを楽しんで過ごしている。また、迎えに来た保護者に子どもの様子を伝えると家では見られない姿として喜んでもらえている。

図２３　子ども教室の様子

５－６　実践事例からのまとめ

地育リーダーズでは、子どもたちと地域の住民、団体、企業等の一人ひとりと双方向で繋がっていくのが、地域学校協働活動を担う者の役割と心得て活動している（図２４）。これらの実践を通して得ている感触を、児童生徒側、学校側、地域側の３つの側面からまとめた。

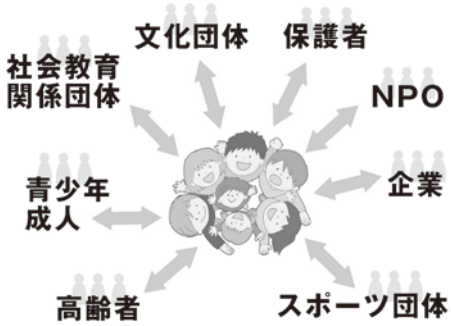

図２４　地育リーダーズの役割

①児童・生徒側
・学校とは違う、地域ならでは学び（人との関わり方、コミュニケーション等）ができる。
・地域の価値や魅力を知ることができる。
・黒川の地域力が、子どもたちの心の根っこに少しずつ伝わってきている。

②学校側
・ふるさと教育の一環として大変役立っている。
・学校の働き方改革に繋がる工夫がある。
・学校教職員が地域を学ぶ貴重な機会となっている。

③地域側
・子どもと関わることで、地域住民の活力や自己有用感に繋がっている。
・地域づくりや、地域の支えに繋がっている。

６　おわりに　―くろかわ地育リーダーズの今後―

６－１　これからの活動に向けて

新型コロナウイルス感染症の流行拡大とともに歩み出した２年であり、地域諸団体組織等に趣旨説明をし、理解を得る機会がないままのスタートとなった。これからさらに活動が広がると、新たな課題に遭遇することも十分にでてくることが想定される。

①子どもたちに対し、黒川のあらゆる人や産業が関わってもらえるよう、さらに働きかけを強化していかなければならない。

②役割や趣旨の浸透を図るため、地育リーダーズは全戸にチラシを配布した。その後、前・後期に分けて活動報告チラシ（図２５）を作成し、全戸配布により周知に努めてきた。また、学校から出される学校報や学級だよりに活動の様子を掲載してもらうよう協力を求め、地育リーダーズとの関わりを意図的に紹介してもらっている。さらに地元ケーブルテレビに取材を依

図２５　活動報告チラシ

頼し、放映するなども周知の一助としている。しかし、地域づくりの原動力は、ここに住む一人ひとりの意識にあると心得ているので、時間と労力はかかるが、やっていることの価値をみんなで共有し、意識付けていくことが必要である。
③意味ある事業にしていくために、Ｐ（計画）・Ｄ（実行）・Ｃ（評価）Ａ（実行）のサイクルに立つ事業の推進である。「学校を核とした地域づくり」と言うが．地域と結ぶだけに終わる地域学校協働本部であってはならい。コーディネートした一つひとつの取組みをＰ・Ｄ・Ｃ・Ａサイクルにのせ、子どもと地域の両面から次に向かっていかなければ、地域づくりの視点が失われる危険性がある。
④保育園の園長や保護者代表も学校運営協議会の一員であるが、保育園との連携協働は、今一歩の状況である。そのため保育園・小学校・中学校の１５年間を通してふるさと黒川を心の根っこに植え付け、次の活動の幅へと広げていかなければならない。

６－２　学校運営協議会の在り方を再考

地育リーダーズのメンバーは、令和３年度ぎふ地域学校協働活動センター主催の地域学校協働活動推進員等研修に全員が参加し、学びを深めた。研修を通して次の１歩を踏みだすために、子どもたち、学校そして、地域にとって本当に必要な活動をしていくためにはどうしていくのがよいかを真剣に考えた。そして１１月の学校運営協議会で、会長が「学校運営協議会改革（案）」として、次の提案をした。
①地域学校協働本部（くろかわ地育リーダーズ）との連携・協働をより明確に位置づけた運営をめざしたい。
②学校運営協議会の構成員は、地域の充職に負うところが大きい。充職に限らず地域や学校に熱意を持つ人を選任してさらなる活性化を図れないか。
③会議内容や熟議の内容について再考をする必要はないか。会議のマンネリ化からの脱却や課題への即応が求められる。
④課題を含めた内容で自由闊達に話題が広がるように、回数にこだわらない会議を目指してはどうか。

学校運営協議会と地域学校協働活動とは、表裏一体・足並みを揃える活動であることを念頭に、地域の子どもの育ち及び地域づくりの将来を考えた提言である。そして、常に先を見据えつつ地域住民の参画意識を育て、「地育のちから」を信じて今後も取り組んでいく必要がある。

注）
１）安藤由美子・長屋メイ子・益川浩一「地域学校協働本部の組織化に関する実態把握と類型化の試み」『地域志向学研究』5、pp. 24-30、2021 年を参照。